

# 中村弥六に対する 再評価のはじまりと変容

---

国士舘大学 21世紀アジア学部

講師 佐野 実

はじめに

---

# これまでの報告と本報告の位置づけ

---

- 金山氏報告  
=中村に対するネガティブな評価が行われるまでの過程。
- 木村氏報告  
=中村に対するネガティブな評価が政界との関係の中で確定する過程。
- 本報告  
=中村に対するネガティブな評価が戦中にプロパガンダへの利用を通じて反転し、さらに現代の名誉回復を重視した評価へと変わる過程。

甦る中村弥六像!!

# 二つのターニングポイント

---

- ・ 昭和17(1942)年の13回忌法要

⇒ 再評価のきっかけ

- ・ 昭和35(1960)年の33年祭

⇒ 評価の変容

# 1. 中村弥六に対する再評価のはじまり

---

――13回忌法要の記録から

# 各地で執り行われた法要

---

・13回忌法要は1942年に3回(東京2回、長野1回)開催された。

1942年 3月22日 下谷・谷中墓地(東京) ←近親者のみ(割愛)

5月25日 上野・精養軒(東京)

7月17日 高遠・峯山寺(長野)

# 5月25日 上野法要(東京) =政治イベント

---

・「一目見せたかった”**新生比島**”先見の明に栄光——あす悲運の中村翁慰霊祭」(『朝日新聞』1942年5月24日)

:「新生比島」とは、日本軍によってアメリカから「独立」し、「大東亜共栄圏」に組み込まれたフィリピンを指す。

=**中村は「大東亜共栄圏」構想の先駆け**であるという評価。

プロパガンダ!!

# 上野法要の成果

---

- ・上野法要は『朝日新聞』や『比律賓情報』を通じて国内外に広く報道された。
- ・結果、日本占領下で反日感情が高まっていたフィリピンから、アギナルド発の感謝状を獲得することにも成功した。
  
- ・地元・高遠ではどのような法要が行われたのか？

# 7月17日 高遠・峯山寺法要(長野) =プロパガンダと名誉回復の葛藤の場

・「背水翁墓前に捧ぐ」:

布引丸事件は日本のためであった。挫折して「乱臣」の汚名を受けた。今やフィリピンは「大東亜共栄圏」の一環として新生した。中村の志は滅びなかった。

上野法要同様に、中村のフィリピン支援を「大東亜共栄圏」構想の先駆けとして位置づけている。

※発起人一覧

・布引丸真相発表(「秘録」の配布)。

中村の名誉回復自体を重視する動きもあった。

中村弥六「背水翁墓前に捧ぐ」(伊那市立高遠町歴史博物館蔵「布引丸事件関係資料」封筒9「弥六法要関係」所収)



円谷裕美子氏提供<写真の氏名は円谷氏による矢澤勝治郎氏の孫章一氏への聞き取りによる>

# 以上から見て取れる二つの論理

- ・中村の再評価は大(=国家)小(=郷土)二つの論理に基づいて行われた。
- ・全ての法要で、中村は「大東亜共栄圏」構想の先駆者と位置づけられていた。中村の再評価は日本帝国主義のプロパガンダとして始まったのである。  
(↑日本の国益を目的とした「**国家の論理**」に基づく再評価)
- ・ただし高遠法要で布引丸事件の真相を発表するなど、中村の名誉回復自体を重視する動きがプロパガンダよりも小さい規模で確認できた。  
(↑中村の「冤罪」を訴えるための「**郷土の論理**」に基づく再評価)

終戦に伴い、「国家の論理」に基づく再評価が不可能になる。  
中村に対する評価はどう変わったのか？

## 2. 中村弥六に対する現在の評価の形成

---

――33年祭の記録から

# 進徳館100年祭 並びに中村弥六先生33年祭

---

- 1960年9月23日開催。
- 自治体(高遠町、同教育委員会等)主催
- 関連する史料が極めて少ない。

例)当日配布されたパンフレット,『伊那路』

# 33年祭の目的

---

・「中村先生略伝」:

「先生は累を関係者に及ぼす事をおそれ隠忍沈黙を守られた」

中村の名誉回復を試みるも、  
「大東亜共栄圏」構想の先駆者としての位置づけはなし。  
(=「郷土の論理」に基づく再評価のみ)

・「郷土の論理」による再評価はフィリピン独立100年祭により、国境を越えて認められ、その目的を完遂した。

「進徳館100年祭並に中村弥六先生33年祭」(伊那市創造館所蔵「中村家文書(中村弥六関係)」所収)

1998年6月12月付フィリピン共和国大統領フィデル・V.ラモス、国家百年祭委員会委員長博士サルバドール・H.ラウレル、フィリピン独立宣言の地(アギナルド記念館)委員長マモーフィナ・メレンシオ・ヘレラ判事宛長野県高遠町長北原三平(下田桂氏所蔵「下田家史料」)

# 21世紀に入ってなお 「変貌」を続ける中村弥六

---

・1993年から自治体によって、中村を森林事業の先駆者として顕彰する動きが始まり、2002年まで続いている。

=かつての再評価は布引丸事件をどう理解するかという点からなされていた。  
これはその枠組みから離れた、新しい「**緑の論理**」による再評価のはじまり。

1993年10月20日付中村弥六遺族宛長野県高遠町長北原三平「ふるさとメモリアル植樹祭へのご招待」(前掲「下田家史料」)

2002年9月3日付土橋久雄宛高遠町長伊東義人「『中村弥六先生を語る会』のご案内について」(前掲「下田家史料」)

おわりに

---

# 中村再評価の変遷

13回忌	「国家の論理」	「郷土の論理」	
33年祭		「郷土の論理」	
21世紀		「郷土の論理」	「緑の論理」

・中村の再評価は戦中主に**プロパガンダ**として始まり、戦後は中村個人の**名誉回復と森林事業の業績への称揚**に重点を置くものへと変容したのである。

# 今後の課題

・高遠の皆さんにご教示願いたいこと!

---

・13回忌法要に出てくる高遠郵便局坂井直彦の詳細

・33年祭ほか戦後の顕彰事業に関する資料や記憶(地域社会と自治体の両面から検討したく思います!)

# 参考文献一覧

## ・未公刊史料

伊那市立高遠町歴史博物館蔵「布引丸事件関係資料」

伊那市創造館蔵「中村家文書(中村弥六関係)」

下田桂氏蔵「下田家史料」

## ・公刊史料

### 地方志

『高遠町誌 人物篇』、『長野県上伊那誌』

### 新聞・雑誌

『朝日新聞』、『比律賓情報』、『東京日日新聞 長野版』、『伊那路』

## ・二次文献

### ジャパンナレッジLib

高綱博文「『背山事件』の記憶——宮崎滔天・中村彌六・犬養毅・平山周の場合」(『史叢』第104号、2022年12月)

円谷裕美子「中村弥六『布引丸事件秘録』再考——『昭和三年版』を中心に」(『史叢』第101号、2019年9月)

北村勝雄「布引丸事件と中村弥六——比律賓独立と清国革命援助」(『伊那路』第10巻第4号、1966年4月)

森下正夫『中村弥六物語』(高遠町、1997年)

ご清聴、ありがとうございました。